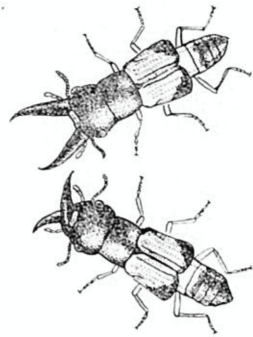


COLEOPTERISTS' NEWS

甲虫ニュース

No. 37

(Apr. 1977)



日本産ミズスマシ科概説(1)

佐藤正孝

はじめに かつては、郊外へ出掛けたりすると、水田、池、小川、その他の僅かな水溜りでさえも、水面をグルグル輪をかきながら泳いでいるミズスマシの姿をよく目にしたものである。しかし、ここ10数年来、農業、産業公害などによる水汚染問題が世論を喧しはじめてから、このミズスマシその他の水生昆虫の姿を見なくな

ったような気がする。確かに、筆者自身も子供の頃は沢山いた水生昆虫がいなくなったとの感じを強くし、最近では時として研究資料の入手にも困難をきたす場合があるようになった。こんなことを話し合いながら、一部の人々から、日本の水生甲虫について早くまとめておかないといなくなってしまうのではないかと、といったような激励とも威かしともつかぬような意見をいただいたりしていた。その矢先、本会の黒沢良彦・渡辺泰明両幹事から、タマムシ科の概説が終るから何か水生甲虫について書いたらとお薦めを受けた。黒沢博士の名解説の後で、この大任はとも思ったのであるが、ミズスマシ科を手始めとして水生甲虫について何とか筆を進めさせていただくことにした。ここに、黒沢・渡辺両幹事のご好意に深謝の意を表したい。

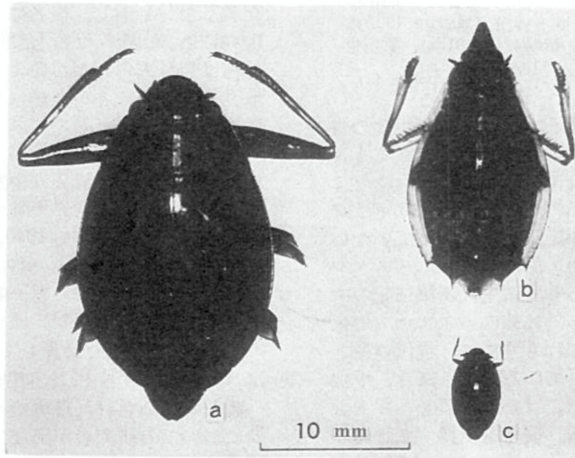
概説 ミズスマシ科の甲虫は、その形の特異なことから、食肉亜目の他の群と容易に区別できるので、SHARP (1899) や FOWLER (1912) のように別の亜

目を設けなければといった意見、LENG (1920) や JEANNEL (1941) のように他の群と特に分けた主科を設けたり、幼虫の分類からそれに賛成する BÖVING & CRAIGHEAD (1931) などさまざまな意見がある。しかし、HATCH (1925), CROWSON (1954), LARSÉN (1966) など最近ではゲンゴロウ科近縁の1科にす

ぎないとする意見が支持されているようである。ミズスマシの示す特異な形態は、水面に生活するための適応の結果にすぎないと考えられている。

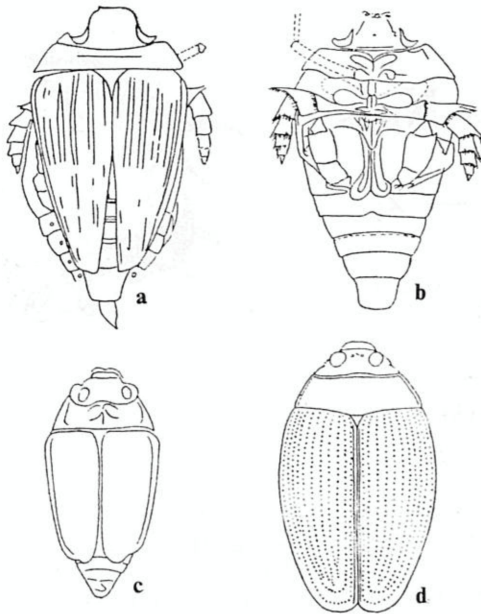
現在、ミズスマシ科には全世界に約800種が知られており、主として熱帯から亜熱帯にかけて分布している。日本からは僅か15種しか知られていないが、そのほとんどが南方系要素のものである。人生との直接利害関係がないこともあって、これまであまり研究されてきていないことを考えると、多くの種がまだまだ追加されそうである。最近でも、BRINCK, MOUCHAMPS, OCHS の諸博士によってかなりの種が、とくにアフリカ、南アメリカから記載されてきた。しかし、ここ半世紀にわたって世界のミズスマシを対象に研究を進めてこられた OCHS 博士が1971年85才で亡くなられたことは非常に残念である。

系統的に、ゲンゴロウ科に近いことを述べたが、HATCH (1925) によれば、中生代三疊紀からジュラ紀にかけてゲンゴロウ科から分れたと分類や分布の



第1図 いろいろなミズスマシ

a: *Dineutus (Dineutus) macrochirus* REGIMBART (New Guinea) b: *Dineutus (Porrhohynchus) marginatus* CASTELNAU (Borneo) c: *Gyrinus (Gyrinus) japonicus* SHARP (日本)



第2図 ミズスマシの化石

a, b: *Palaeogyrinus strigatus* SCHLECHTENDAL, 漸新世 (SCHLECHTENDAL, 1894 による) c: *Miodineutes oeningensis* HATCH, 中新世 (HATCH, 1927 による) d: *Gyrynus praeopacus* LOMNICKI, 更新世 (LOMNICKI, 1894 による)。

研究から推定している。化石としては、新生代の古第三紀漸新世から *Palaeogyrinidae* に属する1種 (*Palaeogyrinus*) が知られており、ゲンゴロウとミズスマシの中間形態を示している。この種はドイツ北部で発見されたが、眼が上下に二分されていないことはゲンゴロウに近いが、他の特徴はミズスマシのそれを思わせるものがある。新生代新第三紀の中新世や第四紀の更新世から約15種のミズスマシの化石が知られているが、いずれもすでに、現代の種とあまり変らない形態を示している。いっぽう、甲虫の起源に関する議論の中で、ゴキブリ類とヘビトンボ類の2つの起源説がある。後者を支持する証拠の一つとして、ミズスマシの幼虫がヘビトンボの幼虫に非常に似ていることをあげていることは注意をひこう。これは今後の研究課題の一つでもある。

日本産種の研究史 日本から最初にミズスマシを報告したのは MOTSCHULSKY (1866) でコミズスマシ (*G. curtus*) が他の多くの昆虫に混じって唯1種記載された。ついで、甲虫の研究では欠かせないほど有名な G. LEWIS が持ち帰った標本に基づいて、日本の水生甲虫研究の重要な原典となる“The water-beetles of Japan”を書いた SHARP が、その報告の中で 1873 年にミズスマシ (*G. japonicus*) とオオミズスマシ (*D. marginatus*) の2種を記載し、1884 年にはオナガミズスマシ属の3種 (*O. agilis*, *punctipennis*, *regimbarti*) を記載した。それと前

後して、REGIMBART (1882, '83) は世界のミズスマシをまとめたが、日本産種としてはヒメミズスマシ (*G. gestroi*) を記載した。その中で、*G. curtus* としたものは SHARP (1884) が *G. japonicus* に相当するものであるとしている。

20世紀に入って、松村 (1906) が図鑑の中ではあるが、オキナワオオミズスマシ (*D. indicus*) を記録したが、後にこの種は *D. mellyi* の同定違いであることが判った。ZAITZEV (1908) は旧北区のミズスマシ属 (*Gyrynus*) をまとめ、それまでに知られた日本産種を含み検索が付されている。さらに、ZAITZEV (1910) はオナガミズスマシ属 (*Orectochilus*) の2種を日本から記載しているが、後に OCHS (1930) は日本産種でないことを報告している。1920年代以降 OCHS 博士の活躍が始まりいろいろな報告に断片的ながら日本産種が含まれており、1926年には *D. marginatus* を *D. orientalis* のシノニムとした。

1930年代に入ると日本人の活躍が目覚しく、神谷 (1931) がオナガミズスマシ属について報告し、ついで滝沢 (1931) が日本人として始めて全種をまとめた。神谷 (1933) はひきつづきオオミズスマシ属、ミズスマシ属、オナガミズスマシ属と属ごとにまとめ、テラニシオナガミズスマシ (*O. teranishii*) とオナガミズスマシの亜種 (*O. regimbarti odaensis*) を記載した。しかし、後者については、上野 (1954) が paratype を調べその有効性をうながすまで、この亜種は忘れ去られたかのように原著者の報文中にも取り扱われることがなかった。神谷 (1936) は日本動物分類の1冊としてミズスマシ科をコガシラミズムシ科とともに解説したが、それを最後に、日本人によるミズスマシ研究は中断されることとなる。

その後、第2次世界大戦で国外との連絡がとだえている間に、BRINCK (1940, '41) がミズスマシ属の2種 (*G. reticulatus*, *nipponensis*) を記載したが、未だに日本ではほとんど一般に知られないままである。また、OCHS (1949) は日本産全種についてまとめ、一部に再記載を公表しているし、ZAITZEV (1953) は Fauna USSR で日本産種にも言及している。

戦争で中断された日本での研究活動は、ミズスマシについての研究者が出ないこともあって最近まで、図鑑類などでの図説を除いてはほとんどなかった。近年になって、琉球列島での昆虫相調査が活発となり、佐藤 (1962) は徳之島の種について報告し、ツマキレオオミズスマシを亜種 (*D. australis tokunoshimanus*) として記載した。ひきつづき、佐藤 (1971) は八重山群島からミズスマシ属とオナガミズスマシ属のそれぞれ1種 (*G. ryukyensis*, *O. yayeyamensis*) を記載した。ごく最近になって、上野ほか (1973) は“日本淡水生物学”の中で日本産種の概要を述べ、亜科までの検索を付した。

以上が成虫による日本産種の小史であるが、幼虫や生態についての報告は、横山 (1929)、恒遠 (1936)、荒 (1936, '40)、島 (1937)、丹羽 (1938)、下泉・稲葉 (1938)、本城 (1941, '45)、森山 (1941) など僅

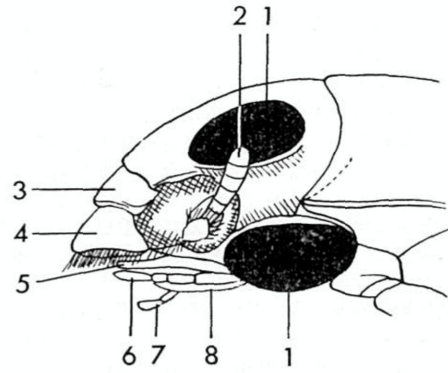
かにすぎない。幼虫の分類については、BERTRAND (1972)の報文が最も参考となる。日本産種については、津田ほか(1962)による幼虫3種の図説は検索もあり手引として手頃である。

外部形態 体長3~25mm。体は楕円ないし長楕円形で、背面は膨隆するが、体下面はやや扁平となる。背面は滑沢 (Gyrinae, Enhydrinae) または密に微毛を具える (Orectochirinae)。色彩は黒を主調とするが、褐色を帯びたり、緑気味の光沢を有する場合がある。体下面、肢、口器、体背面の両側など黄色ないし褐色となることがある。

頭部は幅広く、背面は滑沢。頭楯は明瞭に認められ、横長となる。上唇は大きく、半円状あるいは三角状に前方へ張り出し、縁部に軟毛を密生する。複眼は大きく、上下に二分され、上方のそれは下方のものより小さい。触角は上唇の基部と上下複眼間の窪みから生じ、8~11節からなり、非常に短い。第1節は小さく球茎で、第2節は大きく盃状で梗節を付属させ、その外縁に細毛を具える。第3節から先端節はそれぞれ密に接し棍棒状となるが、属により節数が異なる。口器は頭部の前方に付き、大腮は短く、内葉節は細くて尖る。小腮枝は4節からなり、先端節が長い。小腮基部は膨れる。下唇枝は3節からなる。亜下唇基節は中央部が窪み、両翼がよく発達する。

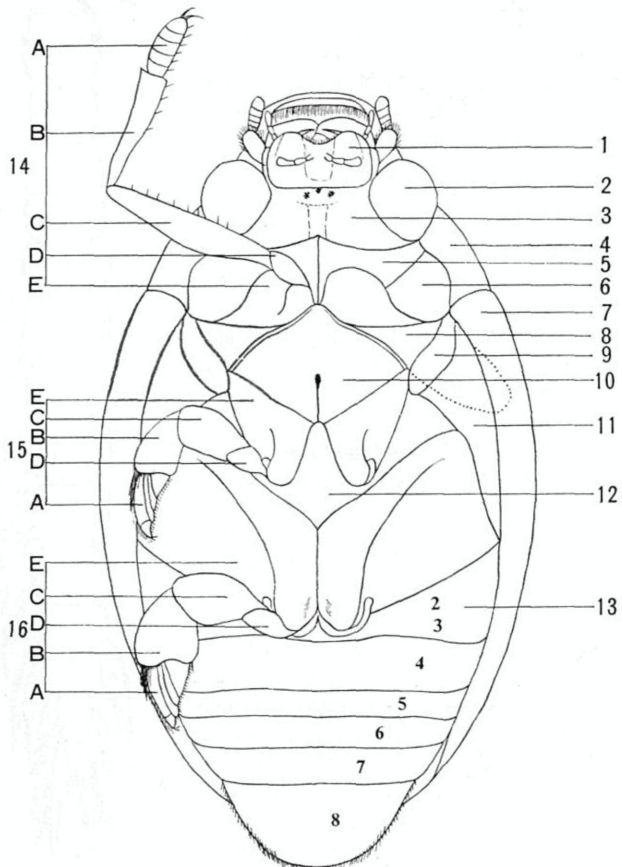
胸部は頭部より幅広く、両側は前方へ狭まり、前・後縁は波状となり、背面は滑沢。前胸腹板は横長で、中央部が隆起し後方は突起となる (Gyrinae, Enhydrinae) か、あるいは僅かに突出する (Orectochilinae)。前基節窩は後方が開く。中胸腹板は大きく、基部に粗大点刻を散布し、前縁は縁取られる。中基節はよく発達し、左右は離れている。中・後胸前側板および後側板は圧下され、前肢を納めるように溝状となっている。後胸腹板は小さく、両側は中・後基節の間に翼状に延びる。後基節は大きく、略三角状で隆起線によって圧下された部分と明瞭に分けられ、後者は後肢を納めるようになっている。小楯板は認められない群と認められる群がある。前肢は細長く、よく発達している。跗節はほぼ同じ長さで、雌は単純であるが、雄は下面に吸盤を具える。中・後肢は短かく、扁平で、背面からは僅かに認められる位である。各肢の基・転節はよく発達している。

上翅の基部は前胸背と同じ幅で、両側は中央部で最も幅広く、そこから後方へ狭まり変化が多く種によって特徴がある。両縁は上反し、側片は基部から翅端に達する。背面は膨隆し、11条の点刻列を具える場合 (Gyrinae) とそれを欠く場合 (Enhyd-



第3図 ミズスマシの頭部

1: 複眼, 2: 触角, 3: 頭楯, 4: 上唇, 5: 大腮, 6: 小腮枝, 7: 下唇枝, 8: 亜下唇基節。



第4図 ミズスマシの体下面

1: 亜下唇基節, 2: 複眼, 3: 頭楯下部, 4: 前胸側片, 5: 前胸腹板, 6: 前胸側板, 7: 上翅側片, 8: 中胸前側板, 9: 中胸後側板, 10: 中胸腹板, 11: 後胸前側板, 12: 後胸腹板, 13: 腹部, 14: 前肢, 15: 中肢, 16: 後肢, A: 跗節, B: 脛節, C: 腿節, D: 転節, E: 基節。

rinae, Orectochilinae)がある。間室は平坦である。後翅とその折りたたみ方の形式はゲンゴロウ科のそれによく似ている。

腹部は8節からなり、腹板第1節は消失し、第2・3節は癒合して1節のようになる。そのため、外部からは6節のように見える。背板は先端1節または2節が翅端より露出し角質となる。雄交尾器は三片型で、中央片は単純で先端に向かって細くなり、側片は先端に向かって拡がり、前縁に細毛を具える。基片は膜質で、中央・側片と密に接していない。雌交尾器の産卵管側片はよく角質化している。

幼生期の形態 卵：長楕円形で淡黄色を呈し、表面は網目状となる。長さはミズスマシで約1.5mm。

幼虫：体長は10~30mmで、体は細長く、やや扁平である。色彩は白色で部分的(とくに頭・胸部)に黄ないし黄褐色となる。

頭部は楕円形で、背面に頭蓋線が認められる。頭楕前縁には小歯があり、その数は属によって異なる。触角は4節、小腮枝は4節よりなるが触角より長い。下唇枝は3節。大腮は細い鎌状。単眼は6個が一群となる。前胸は硬化し、中・後胸より細い。腹部は10節からなり、第9、10節は他節より著しく細い。第1~8節の両側に1対の鰓突起を具え、第9節のそれは2対ある。第10節先端に2~4個の鈎爪を具える。

蛹：楕円形で、背面に微毛を装う。頭部は腹面に向かって弯曲している。腹部は8節よりなる。

幼虫の分類については、今後ほとんど触れない予定であるので、ここに参考までに亜科までの検索を付記しておくたい。

ミズスマシ科幼虫の亜科の検索

- 1(4) 頭楕前縁には数個の明瞭な突起を具える。
- 2(3) 頭楕前縁の突起は2~4個で、中央突起に切れ込みがない——Gyrininae
- 3(2) 頭楕前縁の突起は常に3個で、中央突起に切れ込みがある——Enhydrinae
- 4(1) 頭楕前縁は平坦あるいは中央部が単に前方へ張り出すにすぎない——

Orectochilinae

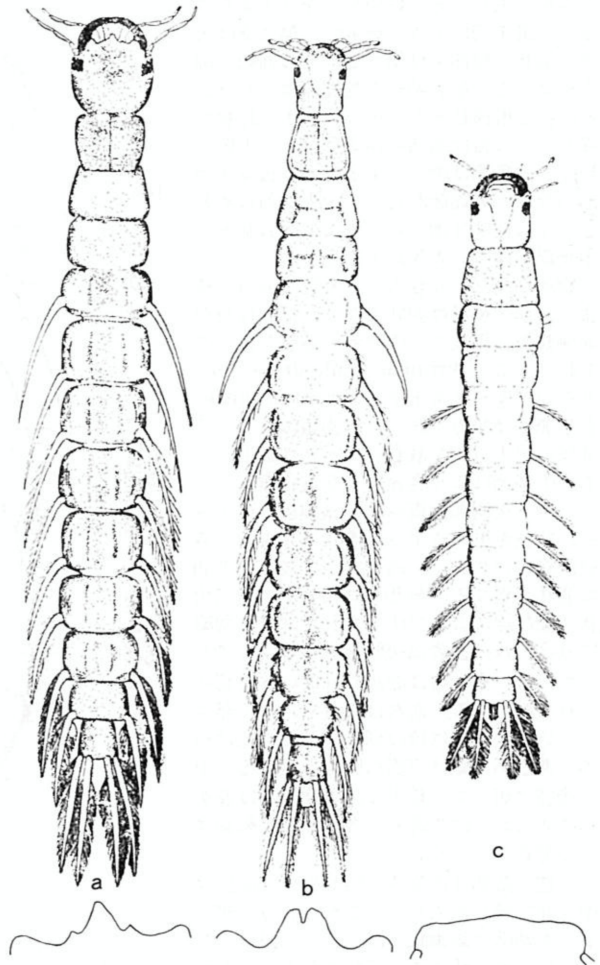
生態 成虫は腹面で水の表面張力を利用して表面膜上を滑り旋回している。しかし、驚いたりすると、水中へ潜るがすぐに浮上してくるし、空中に飛び出すこともでき、時として灯火に飛来する。呼吸は尾端から上翅と腹部の間に貯えた空気で行なうが、水中に潜る時は尾端に気泡をつけている。ミズスマシ・オオミズスマシ亜科のものは主として、池、小川など止水域に近い環境に生息し、オナガミズスマシ亜科のものは主として溪流で、流れがやや緩やかになった環境に生息している

が、いずれの種も群をなしていることが多い。

これは、身を守るすべを持たないものが、群を形成することによって外敵に対処するのだといわれている。

卵は5~8月に、水中や水面の植物に列状に産みつけられる。卵期間は約1週間である。孵化した幼虫は盛んに水中を泳ぎ廻り、水面に落ちたり泳いでいる小動物を捕食する。呼吸は腹部にある鰓突起に行なわれるが、ゲンゴロウが尾端を水表面に出して呼吸するのに比べるとより水中生活に適応しているといえよう。幼虫期間は4~5週間で、老熟幼虫は陸へ上り、水辺の植物などに泥と分泌液で蛹室を作って蛹化する。蛹期間は数日である。

成虫は水表面の生活により適応性を示していることは、その形態がよく示している。前肢は物を捕えるのに使用し、中・後肢は扁平となって、水中で回



第5図 ミズスマシの幼虫とその頭楕前縁
a : *Dineutus (Spinodineutes) orientalis* (MODEER) b : *Gyrinus (Gyrinus) japonicus* SHARP c : *Orectochilus* sp.
(いずれも津田ほか, 1962による)

転させて水面を泳ぐのに適応している。なお、その際水面に生じる円形の波の反射を触角で受け止めて方向を知るといわれている。眼は上下に二分されるが水面を泳ぎながら、水中と空中を同時に見れる機能をもっている。もちろん体形は水面生活に好都合となっている。なお、越冬は成虫が、水辺の土の中に潜ってする。食性は幼虫と同じようである。

分類 ミズスマシ科は3亜科に分けられるが、日本にはそれらに含まれるそれぞれの代表的な3属が知られるだけである。それで亜科への検索が即属への検索に代用できることとなる。前に記述した科の特徴、ここに示した検索や今後示す検索などに用いた特徴は、日本産の種を対象として用いてあるため、諸外国のものには充たない部分のあることを付記しておく。

ミズスマシ科の亜科の検索

- 1(4) 第8腹板は半円形で、中央に細毛からなる条線はない。
- 2(3) 上翅の会合線は緑どられる。前胸背板の後角に小孔がない。小楯板は認められない。口器に小脛外葉片がある——Gyrininae
- 3(2) 上翅の会合線は緑どられない。前胸背板の後角に数本の剛毛をもった小孔がある。小楯板は認められない。口器に小脛外葉片がない——Enhydrinae
- 4(1) 第8腹板は細長く、第7~8腹板中央に細毛からなる条線がある。小楯板は認められる。口器に小脛外葉片がない——Orectochilinae
(名古屋女子大学)

○黒島の食葉性コガネムシ

筆者は最近、黒沢良彦博士を通じて、九州大学農学部の榎原 寛氏が大隅諸島黒島で採集した食葉性のコガネムシ類を検査する機会を得た。同島におけるコガネムシ類の分布記録、その他の報告は現在までにはなされていないことから、ここに記録し貴重な標本を恵与された黒沢良彦博士の御厚意に報いたい。

1. *Maladera (Maladera) satoi* NOMURA トカラビロウドコガネ

2♂♂, 2♀♀, 黒島, 24. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

本種はトカラ諸島中之島から1頭の雄を模式標本として1963年に記載されたが、その後採集されたという報告はなく、今回の記録が原記載以来の記録であろうと思われる。

2. *Apogonia bicarinata bicarinata* LEWIS フタスジカンショコガネ

1♂, 2♀♀, 黒島, 24. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

本種は九州本土および奄美大島などに記録があるが、それらの地域の標本に比べて全体的にやや大型(10.5~11.0mm)であることを除き、その他の点で

は特にきわ立った特徴は見られない。

3. *Lachnosterna kiotoensis* BRENSKE クロコガネ

1♀, 黒島, 25. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

4. *Anomala rafocuprea* MOTSCHULSKY ヒメコガネ

1♀, 黒島, 24. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

本個体は、頭部、前胸背、小楯板が暗緑色で強い光沢があり、鞘翅は黄褐色で前胸背などと同様の強い光沢がある。このような色彩を持つ個体は、九州の中南部地域では比較的多く見られるものの、他の地域ではほとんど見ることができない。

5. *Anomala albopilosa albopilosa* HOPE アオドウガネ

6♂♂, 3♀♀, 黒島, 24—25. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

6. *Rhomborrhina japonica* HOPE カナブン

3♂♂, 2♀♀, 黒島, 24—25. vii. 1975, 榎原 寛 採集。

7. *Oxycetonia forticula* JANSON ヒメハマムグリ

6♂♂, 3♀♀, 黒島, 24—25. vii. 1975, 榎原 寛 採集。(東京都練馬区, 小林裕和)

○三浦半島神武寺でベーツヒラタカミキリを再発見
神奈川県神武寺でのベーツヒラタカミキリ *Eury-poda batesi* GAHAN は、戦前に数頭まとめて採集されて以後、2~3年前に翅鞘が拾われるまで、はっきりした記録はなかった。筆者らは1976年、同地において本種を採集することができたので報告しておく。

4♂♂, 15. viii. 1976, 露木繁雄・高桑正敏・小田義広採集; 3♂♂ 3♀♀, 20. viii. 1976, 田中康彦・露木繁雄採集。

8月15日は日中に採集を行ない、主に太いシイの立枯れにある、一見脱出孔のような新しい穴に酢酸エチルを湿した綿棒を差し込んで、出て来たものを捕えた。8月20日は夜間に行き、前述のような方法と、立枯れ表面を歩行中のもの、穴から頭部を少しのぞかしているもの、根の割れ目に産卵中のものなどを得た。

棲息している穴はやや扁平で、なぜか縦長に開いているものがほとんどであった。また大きな穴からは大きな個体が、小さい穴から小さい個体が出てくるのも不思議で、その穴から出たり入ったりしているのだろうか。諸賢のご意見を伺いたいものである。

またこの年には、神奈川県真鶴半島の先端近くでも採集されたが、同地においてはこれまで採集例が知られていなかったもので、併せて報告しておきたい。

3♂♂, 16. viii. 1976, 小林敏男・小田義広 採集。

採集法は神武寺の場合と同様な方法であった。シイの林が残っている場所で探せば、他所でも本種が採集されるのではないだろうか。

(神奈川県逗子市, 露木繁雄・神奈川県高座郡, 小田義広)

○オオスズメバチの巢中から採集されたハネカクシ

昨年末、中島暉躬博士にお会いした時に、同博士がオオスズメバチの毒液分析の必要から多数の個体を巣ごと採集した際、その巣の中から1頭の中型のハネカクシが出て来たとの話をうかがった。早速その標本を郵送していただき検視した結果、それはコクシヒゲハネカクシ *Velleius setosus* SHARP であることを確めた。

本種は比較的稀な種で、現在まで模式産地の蕁菜沼の他、札幌、大菩薩峠、東京都東村山市から記録されているのみである。東村山市からの記録には本種がコナラの樹液に集来していたことが記されているが、このことを除いては生態的知見は皆無の状態である。しかしながら、本種に近縁のナミクシヒゲハネカクシ *V. dilatatus* (FAB.) はヨーロッパでは古くから *Vespa crabro* LINNÉ と共生していることが知られているので、あるいは本種も生態的にオオスズメバチと何らかの関係を持っているものとも予測することができ極めて興味深い。なお、採集データは下記の通りである。

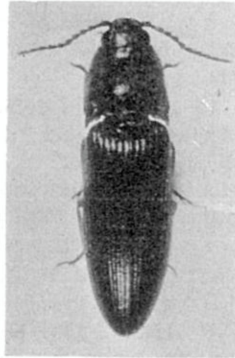
1 雌、広島県世羅郡小国(オオスズメバチの巢中より)、8. xi. 1976、中島暉躬採集。

末筆ながら標本の御恵与と興味ある事実の御教示にあづかった中島博士に心から御礼申しあげる。

(東京農大、渡辺泰明)

○カワイヒラアシコメツキの記録

カワイヒラアシコメツキ *Ischiodontus kawaii* ŌHIRA, 1967 は、1962年に奄美大島の名瀬で採集された1雌個体に基づいて大平仁夫博士によって記載された種であるが、筆者の知るかぎりではその後の記録はないようである。しかしながら、今回屋久島で採集された本種を下記の如く検することができたので報告しておく。



1 頭、屋久島白谷林道、21. vii. 1975、平井 勇採集。

末筆ながら貴重な標本を提供された平井 勇氏に深く感謝する。(東京農大、鈴木 互)

○ナガオミゾムネサビキコリの記録訂正

筆者は本誌36号において、沖縄本島産のナガオミゾムネサビキコリを同島新記録種としたが、すでに KISHII (1974) によって記録がなされていた。また、本種は HAYEK (1973)、大平 (1976) による再度の検討によって学名の変更がなされて、その結果 *nagaoi* と *lupinosus* はそれぞれ別種として取り扱われているので、筆者が先に *lupinosus* として記録した種を *nagaoi* と訂正しておきたい。

(東京農大、鈴木 互)

○伊豆諸島神津島5月のカミキリ

伊豆諸島神津島の甲虫については、来島する採集者が少ないこともあってか、これまでに記録されたカミキリの種類は伊豆七島の中でも利島に次いで少ない。筆者はたまたま過去に4回ほど神津島を訪れているが、そのうちの1973年5月19-21日のカミキリ科の採集記録をここに記し、諸氏の参考に供したい。和名右上の*印は神津島初記録種である。

1. タイワンメダカカミキリ *Stenhomalus taiwanus* MATSUSHITA 1♂.
2. ヒメスギカミキリ* *Palaeocallidium rufipenne* (MOTSCHULSKY) 1♀.
3. ヒメクロトラカミキリ* *Rhaphuma diminuta diminuta* (BATES) 10頭.
4. ハチジョウウサアヤカミキリ *Bumetopia japonica heiana* HAYASHI 12♂♂10♀♀.
5. *Asaperda* sp. 1♂3♀♀.

シナノクロフカミキリ *A. agapanthina* BATES とほとんど区別できないものから御蔵島に産する同属の不明種に近いものまで得られた。これら標本は現在小宮次郎氏が研究中である。

6. アトモンサビカミキリ *Pterolophia granulatus* (MOTSCHULSKY) 1♂1♀.

7. ケシカミキリ *Miaenia tonsa* (BATES) 2頭.
8. オキノエラブコブヒゲカミキリ亜種 *Rhodopina okinoerabuana komiyai* HAYASHI 1♂.

カラスザンショウの枯枝中より得た。本種については筆者らが *Rhodopina* sp. とした(月刊むし18号, pp. 2-9, figs., 1972)ものと同じで、その後本亜種の原因産地である八丈島産の約10頭の標本を見た結果、いちおう上記の亜種名を当てておくことが適当だと思われる。

9. クモノスモンサビカミキリ* *Graphidessa venata* BATES 5頭.

本州産の個体と比較すると、いくぶんクモの巣模様と地色がくすんでおり、この点では三宅島、御蔵島、八丈島の個体と近い。

10. コゲチャサビカミキリ *Mimectatina meridiana* (MATSUSHITA) 2頭.

他の甲虫としてはウバタマムシ、サンゲチビタマムシなどを採集した。(横浜市金沢区、高桑正敏)

○*Coraeus quadrispinosus* FAIRMAIRE, 1891 台湾中南部の記録

1953年黒沢博士は中国から記載された *C. quadrispinosus* FAIRMAIRE, 1891 を台湾北部ララ山産の標本を基に台湾初記録として発表した。その後の報告はないため、ここに台湾からの追加採集例をあげておく。なお標本を快く下さった採集者の方々に深謝する。

- 1 ♀, 南投県南山溪, 28. vi. 1973, 水沼哲郎採集。
1 ♂, 嘉義県奮起湖, 24. v. 1975, 松田 潔採集。
1 ♂ 2 ♀ ♀, 南投県梅峰, 19-20. v. 1975, 筆者採集。
1 ♂ 1 ♀, 高雄県六龟鄉扁平, 5. vi. 1976, 久保田正秀採集。(横浜市磯子区、秋山黄洋)

○伊豆御蔵島から新記録のヒゲナガゾウムシ

伊豆御蔵島のヒゲナガゾウムシ科に関しては、沢田玄正・渡辺泰明（農学集報, 14(1): 1~48, 1969)によって、アトホシヒメヒゲナガゾウムシ *Exillis japonicola*, ホソヒゲナガゾウムシ *Hypseus debilis* の僅か2種が記録されているに過ぎない。しかし最近、筆者は林 良一、鈴木 互両氏から同島で採集された5種類のヒゲナガゾウムシの恵を受けた。それらの中でアトホシヒメヒゲナガゾウムシを除いた4種は同島から未記録なので報告しておく。

1. *Oxyderes fastigata* JORDAN

1頭, 川田, 17. vii. 1974, 鈴木 互採集。

本種は台湾で採集された雌個体に基づいて記載されたもので、本邦においては三重、徳島及び奄美大島等から知られている。なお、筆者は福岡県英彦山で採集した10個体をも検している。

2. *Acorynus anchis* JORDAN

2頭, 里, 17. viii. 1974, 林 良一・鈴木 互採集; 2頭, 川田, 21・22. vii. 1974, 鈴木 互採集。

本種は台湾を模式産地として記載されたが、その後鹿児島、屋久島、奄美大島及び沖縄等から記録されている。

3. *Habrissus longipes* SHARP ナガアシヒゲナガゾウムシ

7頭, 里, 14. vii. 1974, 鈴木 互採集; 5頭, 川田, 15・17・18. vii. 1974, 鈴木 互採集。

4. *Phloeobius stenoides* SHIBATA

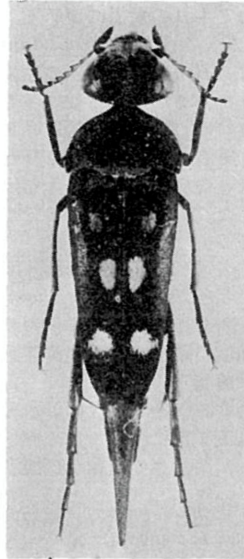
1頭, 里, 17. viii. 1974, 林 良一採集。

本種は大府岩湧山で採集された雄個体に基づいて1963年に記載されたが、筆者が知り得る限りでは現在まで京都及び福岡から記録されているに過ぎない。雌竹を食害するといわれている。

なお、末筆ながら標本を提供され筆者による報告を快諾された林 良一、鈴木 互両氏及び種々御教示の上、文献の閲覧を許された渡辺泰明助教授に深く感謝する。(東京農大, 妹尾俊男)

○オオキボシハナノミの北海道における採集例

オオキボシハナノミ *Hoshihananomia auromaculata* (CHŪJŌ) は現在3亜種に分けられ、原亜種は台湾に、subsp. *amamiana* NOMURA は奄美大島に、subsp. *nipponica* NOMURA に当てられているものがトカラ列島中之島、屋久島、対馬、九州、四国、本州、北海道に分布する。もともとは南方系の種であろうと推測されるが、本州では *nipponica* の原産地である奈良県春日山の他に、近年相次いで和歌山県大塔山、三重県平倉、山梨県小金沢、福島県下などから報告され、本種の分布がブナ帯にまで及んでいることが判った。一方、北海道においては南大雪のトムラウシで採集された(中根猛彦, 1957) 1♀がこれまで知られていただけだが、中根博士の記述にもあるように、この♀は淡黄色の斑紋を持ち、濃黄色の *nipponica* とは違っていて色彩から判断すれば *amamiana* タイプのものであった。このように、南方系の種と思われるものが北海道にも分布す



るという興味深さに加え、斑紋の色彩の問題もあって北海道における追加採集例が望まれていたが、1976年に入江平吉氏により1頭の♂が採集されたのでここに報告しておく。

1♂, 北海道北見支庁生田原町豊原, 28. vii. 1976.

この個体の斑紋はいくぶん淡黄色きみで、写真からも判るように、小楯板後方の会合部の黄色紋は短く、上翅基部付近の側方寄りの紋は肉眼では認めがたいほど退化し、後方の紋は縮少して縁線部にまったく届かず、しかも上部からの湾入が認め

られないという特徴の他に、体は奄美大島産や対馬・屋久島産の♂と比べるとかなり太く、尾節板もいくぶん太短いという特徴がある。これらを総合して考えてみると、上翅後方の紋の形を除けばこの個体はむしろ台湾産(個体差は大きいようだが)により近い面があり、きわめて興味深いことと思われる。なお、♂ゲンitaliaは他産地のものと特に差は見い出せなかった。

この標本は筆者が保管している。末尾ながら、いつも貴重な資料を恵みいただいている入江平吉氏に厚くお礼申しあげる。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○ハビロキンヘリタマムシ♀の記録

大木 裕氏が月刊むし8号35頁で群馬県武尊山におけるカミキリ採集品という報告の中で、キンヘリタマムシ 1 ex. を報告した。昨年秋に行なわれた日本鞘翅目学会席上でこの標本を検する機会を得たところ、これはキンヘリタマムシではなくハビロキンヘリタマムシ *Scintillatrix chinganensis nipponensis* (Y. KUROSAWA, 1953) の♀であった。本亜種は岩手県区界峠松草で1947年8月1日列車内に飛びこんだ1♂によって記載されたもので、その後群馬県浅間高原で1頭採集されているが未発表であるため、本報告が♀に関して最初のものと思われる。

1♀, 群馬県武尊山十二社付近, 25. vii. 1971, 大木 裕採集, 所蔵。

朝鮮、満洲東北部、大連等に産する原種とは前胸背側縁の形、翅鞘及び腹部の色などで異なる。また、日本産同属のエサキキンヘリタマムシ *S. kamikochiana* (OBENBERGER, 1940) とは腹部末節端の形、前胸背の形、♂ゲンitaliaの形が異なる。

最後に快く発表を許された大木 裕氏、模式標本を見せて下さった黒沢良彦博士に深謝する。

(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

○タイワンアカシアオカミキリの食樹について

タイワンアカシア オカミキリ *Aphrodisium sauteri* (MATSUSHITA) は5月上中旬にクリの花に集まる美しいアオカミキリであるが、個体数は多くないようである。本種の食樹についての報告は今までなかったようであるが、筆者は1975年5月9日台湾南投県霧社のクリ林でクリの樹皮から半分体を出している本種1♀を採集した。脱出口があるので本種の食樹としてクリをあげる。

なお、平山修次郎著「原色甲虫図譜」44図版第8図にトムソンオオアオカミキリ *Chloridorum thomsoni* PASCOE として図示されているのは本種の誤りであるという。(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

——<連絡・報告>——

◇談話会 本年の談話会も昨年通り、3の倍数月(3・6・9・12)に開催される予定ですので予め御承知置き下さい。昨年行われた談話会の演題及び演者は下記の通りです。

第1回例会：昭和51年3月28日、関東及び隣接地域に生息するオサムシ類の分布と問題点—奥村 尚(横浜市)。第2回例会：昭和51年6月13日、小笠原諸島のカミキリムシ相—藤田 宏(東京都)。第3回例会：昭和51年9月26日、日本産オビハナノミ属について—高桑正敏(横浜市)。第4回例会：昭和51年12月19日、1)水生甲虫に関する最近の動向—佐藤正孝(名古屋女子大)、2)東南アジア(タイ・マレー・スマトラ)採集談—斎藤秀生・鈴木 互(東京農大)。なお、例会終了後昨年に引き続き「余剰文献」のオークションが行われ、売上代金のすべてが本会に寄附された。また、恒例の忘年会が「鳥正」で行われ、仙台市の渡辺 徳氏をはじめ多数の会員が参加し虫談に花を咲かせた。

◇会計報告 昭和51年度の決算が下記の通り世話人会で了承されましたので御報告致します。
一般会計収支決算報告(昭和51年12月31日現在)

収入の部	支出の部
前年度繰越 163,745	甲虫ニュース印刷費 (No.33~No.36) 325,720
会費収入 195,000	通信・郵送費 73,250
バックナンバー 77,200	事務用品費 7,700
分譲 77,200	特別会計へ振替 100,000
広告費 40,000	雑費 4,000
預金利子 2,874	次年度繰越 219,849
寄附金 251,700	
合計 730,519	合計 730,519

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ
日本ではじめてできた有頭昆虫針!!
1, 2, 3, 4, 5号(各号100本160円)
なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。
〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)
振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

特別出版会会計収支決算報告
(昭和51年12月31日現在)

収入の部		支出の部	
前年度繰越 250,000	預金利子 19,441	次年度繰越 369,441	
{ 一般会計 から繰入 100,000			
合計 369,441		合計 369,441	

「日本産甲虫目録」の販売

本誌前号(No.36)に予告致しました「日本産甲虫目録」の第1回分が発刊されましたので、内訳及び販売方法等についてお知らせ致します。

No.1 クワガタムシ科(黒沢良彦)9頁; No.2 クロツヤムシ科(同)1頁; No.3 ハンミョウ科(中根猛彦)7頁; No.4 ホソガムシ科(佐藤正孝)1頁; No.5 マルドロムシ科(同)2頁; No.6 ヒラタドロムシ科(同)2頁; No.7 チビドロムシ科(同)2頁。

これら各号は分冊せず一括販売することに致します。また、販売については会計上の混乱等を回避するため談話会では直接タッチせず、一切を東京通販サービス社に委託することに致しましたので、購入希望の方は直接東京通販サービス社にお申し込み下さい。

販売価格は1セット(No.1~No.7)¥.800(送料別)ですが、会員は本号同封の割引券を利用すれば(1回限り)¥600(送料別)で購入することが出来ます。なお、東京通販サービス社への連絡は下記の通りです。

〒156 東京都世田谷区千歳局私書箱33号
Tel. (03) 426-6012 郵便振替 東京0-73,156

東京通販サービス社

甲虫談話会

会費(1カ年)1500円、次号は6月中旬発行予定
投稿〆切は5月20日。

発行人 黒沢良彦
発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電話 (364) 2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下¥1,200, 4個以上¥850(以下同様), 第2地帯¥1,400, ¥950, 第3地帯¥1,600, ¥1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479